様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21　年　5　月　31　日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2008
課題番号：19520265
研究課題名（和文）　ポール・ロワヤルとジャンセニスム：霊性と読者層からみた両者の相関関係

研究課題名（英文）　Port-Royal and Jansenism : Their Spirituality and Reading Public

研究代表者
望月　ゆか（MOCHIZUKI YUKA）
武蔵大学・人文学部・准教授
研究者番号：30350226

研究成果の概要：ジャンセニスムは「怖れと絶望の神学」と批判される。しかし恩寵論争開始以前のポール・ロワヤル黎明期(1640-1643)において、ジャンセニスムと一見矛盾する、人間の主体性を強調する霊的論争書三部作がサン・シランとアルノーによって準備されていた。本研究では、従来まったく指摘されてこなかった三部作の存在と執筆過程を明らかにした。またジャンセニスム論争と文体論争の関わりを 1649 年から『プロヴァンシアル』論争までの文脈で論じた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	800,000	240,000	1,040,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学（仏文学）
キーワード：ポール・ロワヤル、ジャンセニスム、アルノー、サン・シラン、パスカル、17 世紀フランス、霊性、神学

１．研究開始当初の背景

（１）ジャンセニスム的霊性に収斂しないポール・ロワヤル的霊性の発見：1641 年に執筆されながら著者アルノーの死後 1701 年まで未公刊だった『救霊のためのイエス・キリスト信仰の必要性』には、1643 年以降のジャンセニスム論争では姿を消すある種の楽観的霊性がみられる。「怖れと絶望の霊性」と批判されたジャンセニスム的恩寵論は畢竟強いられた論争であり、ポール・ロワヤルが本来公に主張したかった教えを歪めることになったのではないか。

（２）義人の遺棄のテーマの変遷：消極的扱いから積極的扱いへ？

①義人の遺棄は一般信徒に絶望感を与えかねない、アウグスティヌスの救霊予定説の中でももっとも暗い教説である。ポール・ロワヤルは、1642 年末から翌年初頭のアベールによる連続公開説教をきっかけに、ジャンセニウスの恩寵論弁護のための論争書発刊を決意するが、一般信徒が本主題に関心を示すことは望まなかった。アルノーは『ジャンセニウスの第一の弁護』(1644)で民衆に恩寵の教説を説く必要性を論じるが、この記述を字義通り理解してはならないだろう。

②1654 年秋から翌年春にかけてパスカルは『恩寵文書』でこの危険なジャンセニスム的テーマを身近な一般信徒の友人のために正面から論ずる。本書は未完に終わるものの、パスカルが従来のポール・ロワヤルの消極的立場とは一線を画すに至った経緯は何か。

（３）文体論争と交錯するジャンセニスム論争：イエズス会士ヴァヴァサールが 1653 年にラテン語で著したアルノー文体批判は 1660 年代末以降のポール・ロワヤル文体批判の先駆けとなった。なぜ文体論争が 1651 年頃より活発となり、神学論争と並行する重要な地位を占めるに至ったのか。恩寵論争の読者層変遷との関連はないか。

２．研究の目的

（１）ジャンセニスム論争開始(1643)以前のポール・ロワヤル的霊性の解明

①幻の三部作出版プロジェクトの歴史的再構成：改悛（『頻繁な聖体拝領』）、信仰（『救霊のためのイエス・キリスト信仰の必要性』）、愛（著書消失）に関するサン・シランとアルノーによる三部作の出版計画の知られざる全貌を明らかにする。また『頻繁な聖体拝領』の執筆の背景と経過について従来不明とされた点を解明する。

②三部作の読者層の考察

③三部作の霊性分析：ジャンセニスム的霊性との共通点・相違点

（２）ジャンセニスム論争：読者層、霊性の変遷をとくに「義人の遺棄」のテーマから考察

① とくに 1649-1653 年の論敵による啓蒙的神学書の分析

②より一般的な「神への怖れと信頼」のテーマとの関連を、論敵・ポール・ロワヤルの著書から分析

（３）ジャンセニスム論争と文体論争との関連の解明

①文体論争が現れた当時の背景

②オネットム読者層と「暴力的言説」：パスカル『プロヴァンシアル』(1656-1657)に至るポール・ロワヤルにおける論争的戦術の変遷を分析

３．研究の方法

（１）17 世紀の著作および研究書の閲覧と分析による実証的研究：当時の資料は、フランス国立図書館をはじめとする現地図書館での閲覧、および文献複写依頼により収集

（２）文体論的分析

（３）その他、ポール・ロワヤル年次学会への参加、およびソルボンヌ・パリ第４大学フェレロル教授主催「ポール・ロワヤルとその文学的営み」セミネールへの随時出席

４．研究成果

（１）ジャンセニスム論争開始以前のポール・ロワヤルにおける霊的論争書三部作の出版プロジェクト(1640-1643)の解明

①アルノー『頻繁な聖体拝領』の構想から執筆、公刊までの過程の再構成。執筆にあたりアルノーとポール・ロワヤルの同志たちがそれぞれ果たした役割を明らかにすると同時に、「はしがき」の（共）著者をバルコスまたはサシとする従来の仮説を批判的に検証した。本書公刊以前の歴史に関する決定的研究。

②『頻繁な聖体拝領』に続いて公刊されるはずだった同著者による『救霊のためのキリスト信仰の必要性』、愛についての未完の失われた著作の執筆開始から三部作の計画が放棄されるまでの過程を解明した。三部作プロジェクトと愛に関する著作についてはポール・ロワヤル研究史上初の言及となる。フランスで公刊予定のサン・シラン書簡集校訂版の註解に貢献可。

（２）ポール・ロワヤル霊的論争書三部作の読者層に関し以下の知見を得た。2009ー2013年度の新たな科研費研究で発展させる予定。

①ポール・ロワヤルが本来標的としていた主要な二読者層：従来から指摘されているガリカン法服貴族・聖職者だけでなく、敬虔派 dévots （リシュリューのヨーロッパ対外政策反対派のみでなく広義の自覚的信者層を含む。ガリカン法服貴族、大貴族）に注目することが重要である。後者は告解師をイエズス会士とする場合が多かった。そのため、神学論争は霊的指導の権威の所在の問題と直接関わり、フランス社会を巻き込むほどの論争激化に結びつく結果となる。

②ガリカン法服貴族がアルノー『頻繁な聖体拝領』(1643)を広範に支持した理由：フュマロリ（『雄弁の世紀』）が指摘した共通のレトリック的伝統によるだけではなく、「ガリカン教会の自由」―使徒時代以来、フランス教会はカトリック世界において卓越した地位を占めるという理念--につながる思想を本書に見出したため。ただしアルノーは心情的回心が伴わない、精神的次元のみによる本書の礼賛を批判する。

③カトリック宗教改革の文脈における敬虔な自覚的信者の信仰生活：一般的には頻繁な聖体拝領と熱心な喜捨を特徴とする。当時のフランス社会における模範的信者が実は無自覚的な罪人である、その点に気付くことこそが真の回心であり、癒しの第一歩は初代教会に範を取った聖体拝領の一時的中断であるというのがポール・ロワヤルの主張の核心である。しかし本霊性は、敬虔な信者らの宗教的先入観、告解師への敬意の前で躓きの石となる可能性があまりにも高かった。『頻繁な聖体拝領』の出版が数年間延期された所以である。

④霊的指導者からの改革：一般信徒の啓蒙は、まず霊的指導者（高位聖職者、教区司祭）の啓蒙からという認識に立ち、ジャンセニスム論争開始以前のポール・ロワヤルの論争的著作は、一般信徒を射程に入れながらも、聖職者が直接の対象となっている。『頻繁な聖体拝領』は文体的戦略で女性一般信徒（ロングヴィル公爵夫人など）をターゲットにしたというラパン神父の説は、『モンスの新約聖書』(1667)をめぐる文体論争以後現れた後世のポール・ロワヤル文体批判にもとづいており、時代錯誤的な主張にすぎない。

（３）ポール・ロワヤル的霊性、ジャンセニスム的霊性の比較から得た知見は以下の通り。2009 年度以降の新たな科研費研究で発展させる予定。

①『頻繁な聖体拝領』論争のきっかけとなったゲメネ公爵夫人とサン・シランとの霊的

書簡はポール・ロワヤル本来の霊性を色濃く反映している。とくに注目に値するのは、喜捨の霊性である。告解の秘跡における改悛の行為として、喜捨には聖体拝領からの一時的遠ざかりと並ぶ特権的地位が与えられている。また、三部作の失われた第三作目の著書はその背景に、愛の伴わない喜捨行為の霊的価値をめぐる論争が存在するようだ。

②『頻繁な聖体拝領』、サン・シラン-ゲメネ書簡、後年の『ポール・ロワヤル尼僧院戒律集』(1665)等にみられる霊性：自らの罪と弱さを自覚し、へりくだりの心と改悛の行為を通して神に助けを求める者は、神の怒りを和らげ、その憐れみと救霊への確かな信頼と希望をもつことができる。人間の弱さの自覚と神の恩寵の必要性が、具体的な改悛と祈りという行為に結実する実践的霊性であり、改悛と祈りがある限り救霊は確実であるという点で、ある種の楽観主義を感じさせる 。

③ジャンセニスム恩寵論と比較した場合の強調点の相違：ポール・ロワヤル的霊性は具体的な信仰生活における教化を目的とするために、人間の自由意志の主体性に力点が置かれる。この教えは「ジャンセニスム＝神の絶対的意志の前に立った人間の無力さを強調する消極的・悲観的霊性」という通念的理解に反する。しかしパスカルの『恩寵文書』に従えば、二つの霊性は決して矛盾しない。ポール・ロワヤル的霊性では、現在の瞬間に焦点が当てられる。改悛の行為を行っている限り、救霊は確実だからである。それに対し、ジャンセニスムでは、改悛、祈りを行うにあたっては元々神の恩寵が先行することが確認され、その究極的例として「義人の遺棄」が論じられる。これは未来に焦点を当てた霊性である。現在改悛を行っているからといって次の瞬間にもその堅忍が保証されるわけではないからである。ポール・ロワヤル的霊性ではこのような教えは無用の絶望を与えるものとしてタブー視される。

（４）「義人の遺棄」から文体論争へ

①ポール・ロワヤルの厳格な改悛は、「ガリカン教会の自由」というフランスの理想的教会像とも重なる初代教会の教え、また人間の主体性を強調する教えによってエリート信者層の心を捉え、イエズス会その他の霊的指導者の地位を危うくしはじめる。折しも1647 年にはパリのポール・ロワヤルでは教会が新築されサングランの説教が多くの人々を魅了していた。危機感をいだいた論敵たちは、カプチン会士ジャック・ドータン『現世の絶望に対立する、救霊への正当なる希望』(1649)を皮切りに、五命題譴責(1653)に至る４年間に、ポール・ロワヤルの絶望の神学を批判する啓蒙的神学書を５冊立て続けに公刊する。またポール・ロワヤル修道女たちに対する極端な誹謗中傷が行われるのも同時期である。ポール・ロワヤルのブルゼイスは1649 年に義人の遺棄について反駁するが、スコラ的議論に終始し、神への信頼と謙遜を教化する教えであることを強調するにとどまった。

②一般信徒を相手に危険なテーマを扱うことを望まないアルノーは 1651 年『イエズス会神父たちへの建言』において、彼らの中傷に対峙しようと文体批判という新たな戦略を選んだ。1646 年にはヴォジュラの『フランス語についての覚え書き』が出版されており、イエズス会論争著作家の悪文や非純正語法、ネルヴェーズ風のバロック文体の批判はそのまま彼らのエートス批判となり、神学的指摘の正当性を貶めるには絶好の機会でもあった。

③イエズス会士による度を超した中傷は、これまでインテリのオネットムたちを意識して基本的に穏健な論争書を著してきたア

ルノーらの立場を転換させることになる。しかしこれはポール・ロワヤル内部でバルコスらの批判を招いた。ヴァヴァサール神父はジャンセニスト文体の三大特徴を揶揄するラテン語著作『著者の同定が［誤って］なされた誹謗文書についての論考』(1653)で、最上級表現と激しい形容語を多用するアルノーの言説的暴力を指摘した。パスカルの『プロヴァンシアル』の文体はアルノーへの援護射撃と解釈できる。また『第一の手紙』冒頭の画期的短文体は、冗長なペリオッド文体をジャンセニスト文体の第一の特徴としたヴァヴァサールに対する痛烈な皮肉ともみなせる。パスカルの最終的結論は、ジャンセニスト文体など存在せず、真理の友による「聖なる熱情」の文体が存在するのみ、ということである。しかしこのポール・ロワヤル的文体をめぐる議論は1670年代末、「教会の平和」の時代に『モンスの新約聖書』をきっかけに復活することになるだろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３　件）

① Yuka Mochizuki, 《La genèse de *La Fréquente Communion* : de nouveaux éclaircissements》, *Chroniques de Port-Royal*（査読有）, n°60, 2010（発行予定）, ページ数未定。

② 望月ゆか「『プロヴァンシアル』とジャンセニスト文体」、『武蔵大学人文学会雑誌』(査読有)第40巻第1号、2008年7月、p.123-166.
［論文３を大幅に発展させたもの］

③ Yuka Mochizuki, 《*Les Provinciales* et le style janséniste》, *Chroniques de Port-Royal*（査読有）, *La Campagne des Provinciales*, n°58, 2008, p.137-151.

〔学会発表〕（計　１　件）

① 望月ゆか「『プロヴァンシアル』とジャンセニスト文体」、パスカル研究会、2008 年 2 月 29 日、於早稲田大学

６．研究組織
(1)研究代表者
望月　ゆか(MOCHIZUKI YUKA)
武蔵大学・人文学部・ヨーロッパ比較文化学科・准教授
研究者番号：30350226

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし